第九号に寄せて

吉見　孝夫

第九号をお届けします。本号は主に古活字版『伊曽保物語』無刊記第七種本を対象としました。第八号で扱った無刊記第四種本同様に、第七種本は天理図書館蔵の一本のみが知られているものです。

毎号巻頭言では、皆様にお教えいただいたことを報告しております（お名前を引用する際は、論文に準じて敬称は「氏」に統一しております）。前号刊行以後も多くのことをお教えいただきました。

無刊記第四種本の解説では、料紙の情報を欠いてしまいました。石塚晴通氏から、料紙の記事は不可欠であること、例えばキリシタン版で雁皮紙であるのは最高級の位置づけであること、楮紙でも公的性格を持たせる時は精製の度をあげることなどをお教えいただきました。残念ながら私の知識では、第四種本の料紙は楮紙であるとしかお伝えできません。ご連絡をいただいたのは前号を発送した翌日でした。お手許に届いてすぐお読みいただいたことに感謝いたします。

山西正子氏の問題提起に発した「きこりとヘルメス」に関する小論には、これまでになく多くの反響がありました。

中務哲郎氏は『旧約聖書』「列王記」、『出雲国風土記』の逸話をご教示くださいました。前者は、鉄の斧を水の中に落としたところ、「神の人」がその場所に枝を投げると、斧が浮き上がったというもの。後者は、枳佐加比売命が失った弓矢の出現を願ったところ、獣角の弓矢が流れ出てき、これは違うと投げ棄てると次に金の弓矢が流れ出てくるというものです。この「金」は鉄とも黄金の装飾とも解されているようです。『旧約聖書』に無知なのはともかく、『風土記』は日本語学を講じる我が領分のはずなのに、この話は知らなかったと白状しなければなりません。

男神か女神かについて、大倉浩氏は筑波大学生の回答を伝えてくださいました。それによると日本人学生はすべて女神、韓国人学生の回答には男神も女神もあり、中国人学生は河伯、ブラジル人学生はヘルメスとのことです。韓国で女神があるというのは日本の影響があるのでしょうか。

花間隆氏は内外のイソップ寓話集、子ども用の教本での例を知らせてくださいました。

キリシタン資料を研究する漆崎正人氏からは、観音菩

薩風の女身から女神へと移る流れに、マリア像がマリア観音化していくのと逆の過程を感じるとの感想が届きました。女性を神格化するときには、日本ではまず観音の姿にするのでしょうか。

「金の斧、銀の斧」がいくつかのＣＭの題材になっていること、またその影響を五之治昌比呂氏からの連絡で知りました。こういったＣＭを調べることで、イソップ寓話の浸透度、理解度を測ることができるかもしれません。

その他、檜枝陽一郎氏はイソップ寓話とライナールトとの比較に関するテーマにつき情報をお寄せくださいました。

小誌第三号で『遠近新聞』中に引用されたイソップ寓話を論じた小論につき、私の気づかなかった事実を花間隆氏が指摘されました。詳しくは本号の小論をお読みください。また花間氏のインターネット上のサイト「イソップの世界」に、イソップ寓話集の対照表があります。本号に転載させていただきました。

以上の方々、またお名前は挙げておりませんが、励ましのお言葉を送ってくださった方々には深く感謝申しあげます。